

《街の中に作った手作り科学館》

大きな科学館に行って来館者がどのように展示を見ているか観察してみてください。展示物についている説明はちゃんと読まれているでしょうか。体験型の展示物は正しく理解できるように体験されているでしょうか。私がよく目にする光景は、ひたすら展示物についているボタンを押しては、また隣のボタンを押して走り回っている子どもたちの姿です。

大人の私も展示の説明や使い方がわからないことがあります。そんな時ほとんど消化不良な気持ちになってしまいます。誰か説明してくれないかなと思い、科学館の方に質問することもあります。ふつうはなかなかそれができないのではないのでしょうか。

「消化不良にならない科学館があったらいいのに！」というのが理科ハウスを作ろうと思った始まりでした。理科ハウスではほとんどの来館者に声をかけて展示の内容を理解してもらえるように気をつけています。

《10年計画で、とにかくやってみよう》

個人で科学館を作った人はいるのでしょうか。川崎市麻生区黒川という所に「発見工房クリエイト」という科学館があります。創設者の橋本静代先生に会いに行きお話を伺いました。理科ハウスより少し大きな科学館で、庭においてある遊具で共振現象やコリオリの力などを体験することもできます。先生のお話はとても参考になりました。でも自分がやってみたいと思う科学館のイメージとは少し違っていました。発見工房クリエイトは来館するときに申し込みをしないといけないのです。私は散歩のついでに誰でもがぶらっと寄って本も読める

ような科学館を作りたいと思っていました。使える資金にも限度があります。とにかく自分のできる範囲で10年間やってみようという計画を立てました。

全部を一人でやるのは無理かなと思い、学芸員になりたかったという親しい友人の山浦安曇さんに声をかけてやることにしました。ですから理科ハウスのスタッフはたった二人です。企画して作る展示物はほとんどが手作りです。来館者を案内するのも、ホームページを作成するのも、ショップでレジを打つのも、室内の掃除も全部自分たちでやっています。こんな小さな科学館でも、もし10年間続けることができ街の人たちから「もっと続けてやってほしい」という声がたくさんあれば理科ハウスの存在意義があったということになるでしょう。

2008年5月に開館して6年目の現在、来館者数はのべ23000人を超えました。リピーターが多く、理科好きな子どもたちの居場所としてしっかり定着してきました。現状の科学館では来館者の低年齢化が問題になっていますが、理科ハウスでは小学校高学年～中学生が年々増えています。

《助成金に頼らない方法はないのか?》

アメリカの科学館は寄付で支えられているのだと人から教えてもらいました。税金で支えられている日本の科学館とは全く違うやり方です。どうして日本では寄付が集まらないのでしょうか。私が科学遊びを始めた20年くらい前のことです。東京の九段にある科学技術館で「青少年の科学の祭典」が盛大に行われていました。そこに行くと、子どもたちはただでたくさんの実験を教えてもらい作ったものはお土産になるのです。私はこの資金はどこから出ているのかと不思議に思っていました。これと同じような活動が全国に広まりました。私もJST(独立行政法人科学技術振興機構)から助成をうけて科学遊び講座を何度も開催しました。開催する大人も材料費がどうしても必要になる科学遊びは、助成金がな

かっただけだと思ってしまうようになりました。

一方で小学校から理科の授業を手伝ってほしいというお話がありました。学校では先生が実験をしたりするときに使う材料費の工面に苦勞していました。ひとり当たり 100 円の少額でも子どもたちに家庭から持ってきてもらって集めないといけないわけです。学校こそ助成金をもらわないといけないほど何もできない状況だったのです。学校で使える教育費が足りなすぎると感じました。理科担当の先生ももっと増やしてほしいです。

なんとか助成金に頼らないで理科ハウスをやっていけないかと考えるようになったのは、このような学校の現状を知ったからです。理科ハウスの入館料入れは硬貨を入れると 1 円、5 円、10 円、100 円が分かれるようになっていて、来館者がお金を入れるのが楽しくなるように工夫しています。他にも理科ハウスオリジナル商品を作って販売したり、ショップの売り上げにも努力しています。まだ充分ではありませんが経費を節約して、少しでも長く続けていける道を探っていきたいと思います。

《子どもたちの育つ環境づくり》

理科ハウスが大きな科学館と大きく違うのは館内での対話が多いことです。狭い空間なので、隣で科学の話を楽しそうにしている人がいると自然と耳を傾けてしまいます。やがて人の輪ができて、初対面の人同士で理科談義が弾んでいたりします。科学館のスタッフが話題を提供するだけではなく、来館者が持っている知識や情報が生かされて話が盛り上がることもしばしばです。理科ハウスにやってくる人たちは理科が好きで本当にたくさんの情報を持っている人が多いのです。そういう環境のなかにいる子どもたちは自然と学ぶことの楽しさを身につけてしまいます。

子どもは自ら積極的に展示にかかわろうとします。新しい展示のアイデアを思いついたり、解説パネルを作ったり、仮説を立て新しい実験方法を考え出したり。サイエンスカフェの企画から準備、司会までやってくれた中学生もいました。

野外で見つけた虫や動物、鳥の羽、植物などを持ってきて「こんなのいたよ！」と見せてくれることもあります。そんなときは、いっしょに図鑑で名前や生態を調べたりします。調べてもわからないときには、詳しい専門家に問い合わせるようになっています。理科ハウスにつながっている専門家がたくさんいてくださるおかげでできていることです。私たちスタッフの役目は、そうした科学者・研究者と子どもたちとを結びつけることです。

開館から6年が経ち、その内容はとても質の高いものとなっていると手ごたえを感じています。大きな科学館スタッフの方も見学に来るようになりました。町おこし担当の行政の方がお見えになることもあります。これからの科学館や地域の場づくりとしてひとつのモデルとなっているのではないかと考えています。